実践事例2　埼玉県立宮代（みやしろ）高校

# 教育スローガンを掲げ、学校内外への浸透を図ることで、目指す学校像を実現する

退学者の多さ、志願者減少に苦しんでいた埼玉県立宮代高校は、学校改革に先立って学校教育目標を解釈し直し、よりシンプルなスローガンとして明示。教師の目線合わせを促すとともに、目指す学校の姿を地域・保護者へアピールし、退学者の半減、志願倍率の向上を実現した。

## 形骸化した学校教育目標を「生きた目標」に変える

埼玉県立宮代高校では、西浦大治郎校長が赴任した2015年度から「とことん生徒の面倒をみる宮高」をスローガンに掲げ（**図1**）、全教職員を挙げて学校改革に取り組んでいる。

同校には、竹内榮次前校長の時代から「生徒一人ひとりの『よさ』を伸ばし、次代をたくましく生き抜くための学力と規範意識を身に付けた人間を育てる」という学校教育目標（目指す学校像）がある。西浦校長は、この目標をそのまま受け継ぎつつ、それを実現するための理念を現場の教師や地域・保護者に浸透させるために新たなスローガンを掲げた。

「教育目標を引き継ぐのは、教育の継続性という点で大切です。ただし、それを生きた目標として周知し、具体的な教育活動に落とし込んでいくためには、その時の学校を取り巻く状況に応じて目標を解釈し直し、より分かりやすく提示する必要があると考えました」（西浦校長）

西浦校長が学校教育目標の再解釈の必要性を感じた背景には、2つの深刻な課題があった。1つは、退学者の多さである。同校では、1年間に40人以上が何らかの理由で退学する状況が何年も続いており、「一人ひとりの『よさ』」を伸ばし切れているとは言えない状況だった。もう1つは、定員割れの恒常化である。10年度から3年連続の定員割れにより生徒の質が低下し、生徒指導上の問題も多発するようになった。部活動の活性化など、竹内前校長の努力で14年度の志願倍率は1倍を超えたが、なお予断を許さない状況であった。

そうした状況の中、教師は目の前の生徒指導に忙殺され、「生徒一人ひとりの『よさ』を伸ばし……」という教育目標を顧みるゆとりがなかった。また、当時は大学進学実績の向上を図ることで学校の魅力を高めるというのが、学校の方針となっていた。「大学合格者数100人超」を目標に掲げて学力向上に努めたが、目標と現実のギャップを感じる教師も少なくなかった。教務主任の七草木（ななくさぎ）俊先生はこう振り返る。

「当時、現場の教師にとっては、進学実績の向上よりも、赤点を減らしたい、退学を食い止めたいという思いの方が強かったと思います。指導方針と現場の思いとのギャップが大きかったために、教育目標の実現と

いうところまで考えを巡らすことはできませんでした」

## 根本理念を共有することで継続性・柔軟性が高まる

退学者が多い学校として地域に認知されることで、さらなる志願者減少を招き、それが生徒の質を低下させていく――。その悪循環を断ち切り、活力ある学校をつくっていかなければならないというのが、西浦校長の考えだった。

「教育に特効薬はありません。目の前の生徒に向き合い、一人ひとりを大切にして、とことん面倒を見ていく。それしか悪循環を断ち切る道はないと考え、その思いをスローガンに込めました」（西浦校長）

学校によってはわざわざスローガンを立てず、課題に応じた取り組みを矢継ぎ早に打っていく場合もある。スローガンを掲げ、それを教師間で共有することの意味を、西浦校長は次のように説明する。

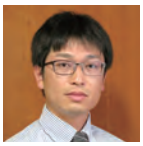
「教育には哲学が必要だと、私は考えています。根幹となる哲学がなければ、取り組みが場当たり的で統

**埼玉県立宮代高校校長**
**西浦大治郎**　にしうら・だいじろう
教職歴34年。同校に赴任して3年目。「洞察力、機動力、対話を重視した教育活動を実践する」

**埼玉県立宮代高校教頭**
**本城千晶**　ほんじょう・ちあき
教職歴24年。同校に赴任して2年目。「常に先を見る。話をしっかり聞く。明確に伝える」

**埼玉県立宮代高校**
**曽我　理**　そが・ただし
教職歴23年。同校に赴任して4年目。「当たり前のことを高いレベルでできる環境で生徒は成長する」

**埼玉県立宮代高校**
**七草木俊**　ななくさぎ・しゅん
教職歴7年。同校に赴任して7年目。「真剣勝負。学び続けることで才能は開花する」



**埼玉県立宮代高校**
**岩下和尋**　いわした・かずひろ
教職歴4年。同校に赴任して4年目。「物事に正面から向き合える芯の強さを身につけさせる」

### 埼玉県立宮代高校

◎校訓は「さとく　たゆまず　たくましく」。基礎学力の向上、教育相談体制の確立、教員研修の充実を3本柱とする学校改革を推進中。部活動も活発で、16年度インターハイ出場のアーチェリー部、演劇部などが実績を上げている。
◎設立　1982（昭和57）年
◎形態　全日制／普通科／共学
◎生徒数　1学年約240人
◎2017年度進路実績（現役のみ）
私立大は、大東文化大、拓殖大、日本大などに延べ28人が合格。短大、専門学校進学54人。就職55人。
◎URL　http://www.miyashiro-h.spec.ed.jp/

図1　埼玉県立宮代高校の学校教育目標とそれを実現するための教育スローガン

**学校教育目標（目指す学校像）**

生徒一人ひとりの「よさ」を伸ばし、
次代をたくましく生き抜くための
学力と規範意識を身に付けた
人間を育てる

**教育スローガン**

とことん生徒の面倒をみる宮高

ここに課題があること、そして、その背景にある問題と原因を考え、それを全教職員で共有した上で、教育目標を実現する理念として教育スローガンを打ち立てた

**問題と原因**
- 退学者の多さ
- 恒常化する定員割れ
- 生徒指導による教師の多忙化
- 指導方針と現場の思いとのギャップ

**上記のスローガンを設定したねらい**
- より手厚い指導を通して、退学者の減少と志願者増加を図る
- 課題の共有化を図り、教師間の目線合わせを進める
- 課題と理念を具体的な教育実践に結びつける

**上記のスローガンを設定したことによる効果**
- 教師間の目線合わせが進み、学校全体の一体感が増した
- スローガンに基づいて具体的・実際的な指導が可能になった
- スローガンをよりどころとして、取り組みのブラッシュアップが進んだ
- 学校の特色を中学生・保護者にアピールしやすくなった

一感のないものになり、仮に成功しても普遍的なものにはなりません。また、方策自体に固執して変化に対応できず、形骸化することもあります。根本理念を教師間で共有することで継続性が高まるだけでなく、状況が変わった時にも柔軟に対応していくことができるのです」

スローガンの共有は、次のようなプロセスで行われた。まず、西浦校長が着任してすぐに、学校経営方針としてのスローガンを作成し、全教職員に伝えた。そして、年度当初に校長が全教職員一人ひとりと行う面談、週1回の企画委員会や職員会議など、あらゆる場面を使ってスローガンの大切さを訴えていった。その際、単にスローガンを繰り返すだけではなく、その背景にある課題の共有も徹底した。

「スローガン自体はありきたりな文言だからこそ、スローガンを浸透させ、血肉化させるためには、背景にある課題についても理解してもらうことが必要です。現実に即した課題なので、先生方にも違和感なく受け止めていただけたと思います」（西浦校長）

実際、スローガンは現実味を持って受け止められ、教師たちがベクトルをそろえて改革に踏み出す第一歩となった。本城千晶教頭は、「学校の課題とセットで提示されることでスローガンの意味がより理解しやすくなったと思います。文言自体もシンプルなので、先生方の意識に浸透しやすく、具体的な取り組みへの落とし込みや、その後の動き出しもスムーズに進みました」と振り返る。

## 理念を共有することで指導のブラッシュアップが容易に

スローガンを共有した後は、それを具体的な指導に落とし込んでいくプロセスへと移行した。理念を実践に移していく過程で推進役となったのが、企画委員会である。管理職と各分掌・学年主任から成る会議体で、埼玉県では常置する決まりになっているが、以前は、職員会議の事前打ち合わせにとどまりがちであった。西浦校長は、それを学校の現状や課題を共有する場として位置づけ、各分掌・学年から意見を吸い上げて、理念実現に向けた取り組みを策定する場へと機能させた。

同委員会の主導の下、ベネッセの「マナトレ（＊）」を使った毎朝10分間の朝学習、定期考査前の指名補習（教科担当教師が、不得意科目がある生徒を指名して行う補習）、大学生が日頃の授業や朝学習、補習のサポートを行う「学習サポーター」の活用などの取り組みが次々と導入された（**図2**）。また、カウンセリングの定期実施、特別支援教育の専門家との連携など、メンタル面から生徒を支える体制も整えられた。

新たな取り組みが立ち上がるだけでなく、スローガンがあることで、従来の取り組みの修正も容易になった。例えば、土曜日に実施する自学自習の勉強会「土曜勉強マラソン」は、「とことん面倒をみる」方針の下、大学生の学習サポーターを活用し、より手厚くサポートできるよう体制が改変された。

逆に、「とことん面倒をみる」という観点から廃止した取り組みもある。西浦校長の赴任1年目、「中間考査段階で生徒の実態を把握し、その段階で手を打つ」ことが経営方針に盛り込まれ、実践された。しかし、あまりに業務が煩雑で、かえって生徒に向き合う時間が足りなくなるといった声が続出したため、翌年廃止された。

「よりどころとなるスローガンがあるからこそ、生徒や教師の実情に

**図2　スローガンに基づいて新設・改善された取り組み一覧**

**❶ 朝学習**
全学年で毎朝 SHR 前の 10 分間、「マナトレ」基礎編（国語・数学・英語）に取り組む。

**❷ 土曜勉強マラソン**
1～3年生の希望者を対象として、定期考査直前の土曜日に、午前4コマ・午後2コマの自学自習・特別講座を実施。

**❸ 指名補習**
不得意科目がある生徒を対象に、定期考査前の放課後、5教科の教科担当教師が該当者を指名して補習を行う。

**❹ 部活動勉強会**
定期考査1週間前から、部活動の中で自学自習と学び合いに取り組む。

**❺ 学習サポーターの活用**
事前登録した大学生 10 人が、「土曜勉強マラソン」や「部活動勉強会」などのサポートを行う。

**❻ 教育相談連絡会の設置**
教頭・学年主任・保健主事・養護教諭から構成される組織で、各クラスや保健室からの情報を基に、スクールカウンセラーや巡回支援員と連携を図る。

＊ベネッセの教材の１つ。学習力を身につける、小・中学校範囲の学び直し専用のプリント教材。

合わせて適正かつ迅速にスクラップ&ビルドができます」（西浦校長）

## 実践を重ねることで理念はさらに浸透する

スローガンが指導計画を策定する際のよりどころになるとともに、実践を重ねることで、より深く理念が浸透していく効果もある。3学年主任の曽我理先生は、「当初は、手厚い指導により退学者が減り、志願者増加につながるという西浦校長の言葉を信じて、がむしゃらに取り組むだけでした。しかし、朝学習や指名補習などで徹底的に生徒と向き合うちに、私自身、生徒との距離が近くなり、学習習慣が身についているという手応えを感じられるようになりました。今は、生徒の反応や成長を身近に感じることが、私自身の達成感や励みになっています」と語る。

企画委員会における提案も、当初は管理職が中心だったが、教師がスローガンに基づく教育活動の効果を実感するにつれ、企画委員や各分掌からの提案が増えていった。七草木先生は、「『とことん面倒をみる』ということは、生徒一人ひとりの特性に応じてきめ細かく指導をしていくということ。これまでだったら『そこまでやるのか』と言われそうな取り組みも提案しやすくなりました。また、教師間でスローガンが共有されているので、生徒に対して『積極的に取り組む者にはとことん指導する準備が、どの先生もできている』と、自信を持って言えるようになりました。理念の共有は生徒との信頼関係を構成する上でも重要です」と語る。

校内でスローガンが共有されたことで、外部に向けて胸を張って学校をアピールできるようになったのも大きな変化だ。前中高連携委員長の岩下和尋先生は、「以前からも、とことん面倒を見る教師はいました。ただし、それをスローガンにして学校全体で共有することによって、『自分は』ではなく、『本校は』とことん面倒を見ると、自信を持って発信できるようになりました。学校のスタンスが伝わりやすくなり、中学生や保護者、中学校に期待感や信頼感を持って受け止めていただけているのを感じています」と手応えを語る。

学校の方針や活動内容を発信していくことで、スローガンに対する認識が教師の中でさらに深まり、より生きた理念として浸透していくのである。

## 次の改革は「進路」を軸とした取り組みへ

改革に着手して2年、学校の雰囲気は大きく変わった。14年度に43人だった退学者は、15年度は25人、16年度は21人と半減した。志願倍率も、定員割れ寸前だった15年度から持ち直し、16年度は1・05倍、17年度は1・08倍にまで改善した。多くの教師が、「1年ごとに違う学校のようになっていく」と感想を漏らしている。部活動も、かつては放課後16時頃にはほとんど校庭に生徒がいない状態が続くこともあったが、今は2年生が中心となって多くの部が活発に活動している。

保護者の学校への関心も高く、かつてはまばらだった体育祭や文化祭も、今では100人以上の保護者が来校するようになった。地域の信頼も回復し、同校の生徒に対するボランティア活動や地域の行事への参加の依頼も増え、多くの生徒が積極的に参加している。「先生方が生徒一人ひとりと向き合うことで生徒の自己肯定感が高まり、積極性が増してきているのでしょう」と、本城教頭は語る。

課題は、退学者のさらなる減少だ。カウンセリング体制などを強化し、より手厚い指導を続けていく。そして、1年ほどの検証期間をはさんだ後、改革を次のステップに移行させる。

そのキーワードは「進路」だ。同校は、大学・短大進学者、専門学校進学者と、就職者がほぼ同比率だが、進路に対する意識はまだ高くなく、16年度の3学年は30人が進路未定のまま卒業した。これまでは将来の進路に目を向けない生徒もいたが、生徒の質が変わってきた今は、「将来」を見据えた様々な取り組みを仕かけていきたいと、西浦校長は語る。

「本校に入学してきてほしいのは、目的意識を持った生徒です。部活動が盛ん、就職に強いなど、何でもよいので、魅力を感じ、自分の目的をかなえるために、本校を選んでほしいと考えています。進学にせよ、就職にせよ、目的意識を持って学校生活を送ることでおのずと退学者が減り、一人ひとりの進路が開けてくると期待しています」（西浦校長）